

『宗教・科学・いのち』から学ぶこと

小 林 邦 彦*

1. はじめに

『宗教・科学・いのち——新しい対話の道を求めて——』という、たいへん魅力的な題名の書籍の書評を引き受けることになった（金城学院大学キリスト教文化研究所・編，新教出版社，2006-07-25発行）。

本書の序文にあたる，金城学院の理事長・学院長 戸田安士氏の「金城学院大学キリスト教文化研究所創立10周年記念出版を慶ぶ」と，金城学院大学キリスト教文化研究所初代所長の眞山光彌氏の「研究所創立のころ」によると，本書は，金城学院大学にキリスト教文化研究所が創立されて10周年の記念として出版されたものであることがわかる。さらに，研究所の現所長である金承哲氏の「はじめに」を読むことで，この出版物の意義を窺い知ることができる。

金城学院大学キリスト教文化研究所は，その創立10周年を記念するために，数年にわたって「差別・差異の克服としての信仰」というテーマの下に一連の研究会や発表会を開いてきた。また，シンポジウム「宗教の見る現実・科学の見る現実」を開催している。

* 中部大学生命健康科学部

ではなぜ、キリスト教文化研究所が、このようなテーマを取り上げたのであろうか。

背景の一つは、2005年に金城学院大学に薬学部が設立され、自然科学を基礎とする学部が初めて生まれたことにより、キリスト教と自然科学との対話、あるいは人文科学と自然科学との対話が必要となったという。またこれとは別に、「いのち」と「いやし」への多層的なアプローチ、つまり、これらの医学的側面、社会的側面、宗教的側面を総合的に扱うべきだとする問題意識や使命感があったことも、背景として挙げられるという。

本書は、数年にわたる金城学院大学キリスト教文化研究所のこれらの取り組み、研究発表や講演の成果をまとめたものである。宗教と科学との関わりについては、現代社会において重要な課題であるが、個別のどの分野からもアプローチが難しく、真正面から取り組みにくいのが実情である。金城学院大学キリスト教文化研究所がこのような課題に地道に取り組んでこられたことに、まず敬意を表する。

本書の内容を簡単に紹介すると、第1部は「宗教の見る現実・科学の見る現実」として、これを表題としたシンポジウムにおけるハインリッヒ・オット氏の講演「意味と真実——無限の神秘を前にした人間の思考」を中心に、講演に対するコメント2編とシンポジウムへの覚書が掲載され、さらに、宗教と科学に関する異なる立場からの論説、つまり、神学と科学、キリスト教と進化論、[宗教と科学]に見る近代化の諸相、生命との対話、の4編が掲載されている。第2部「差別・差異の克服としての信仰」には「いのち」の教育、難病患者の心理・社会的問題、ハンセン病文学とキリスト教、同性愛とキリスト教、神の存在と言葉（作家フォスターを通して）、差別される性（日本古代・中世説話から）、宗教における生と死、という幅広い異なる視点からの7編が載っている。

正直なところ、これらの論説を読み進めるのは容易ではなかった。難渋を極めた。ましてや、ひとつひとつの論説を論評・評価するにはあまりに

も力不足であることを知らされることになった。そこで、宗教と科学との関わりを取り上げた本書に啓発された自然科学者として、評者の思考過程を述べることで書評に代えることをお許しいただきたい。

2. 評者にとっての「宗教・科学・いのち」

宗教や科学、あるいは「いのち」について議論するとき、論者の観点が、個人の生い立ちや、そのなかの特定の経験や、専門の教育課程などに深く依存していると思われる。論者のそのような思想的背景を理解することは、読者・聴衆のみならず発表者自身にとっても、理解を深める上で役立つであろう。そこでまず、評者自身のこれらとの接点を少年時代にさかのぼって考えてみる。

音楽や文学が好きで、たっぷり情緒的に育ったと思う。科学との接点では、民俗学や考古学が好きだった。南信州の農村で育ったが、この地方ではたとえば正月の行事としては、新暦の正月に加え、七日正月や小正月や月遅れや旧暦の正月もあり、それぞれに飾ったり供えたり食べたりするのが決まっていて、それら風習を書き留めたりした。中学のときには社会科の先生のお手伝いで、散在するお寺の仏像の写真を撮りにいったり、円筒埴輪の発掘に参加したこともある。麦畑で見つかった石器からは、これらを使っていた人々の生活を想像することもできた。言語の違いや成立過程を調べるのも好きだった。地方の方言を、気がつくたびに何十も書き出した。近くにある古いお寺の縁起を書き写したこともある。これらは、たんなる興味にすぎないが、内容的には人文科学といえよう。

一方で、自然の法則は、それはそれでたいへん興味があった。天体の運行から月の満ち欠けや季節の移り変わりが説明できること。古典物理学による物体の運動の説明など、日常的に自分でも確かめられ、納得できて面白かった。しかし、化学は、目に見えないことの説明なので、なじみがな

かった。生き物は、日々の生活の中で接する草木、花、実、葉っぱ、どれもが親しく、また、家で飼っているヤギやウサギや鶏、空を飛び竹やぶでさえずる鳥たちも、とても親しい存在だった。しかし、少年時代には、せいぜい、押し葉を作り、同じ植物かどうか近縁の植物かどうか考える以上に深入りすることはなかった。

大学で生化学を専攻することになり、ここで、物質の性質・違い・変化が化学の言葉で語られることが分かった。その後、研究分野は生化学から電子顕微鏡を用いた超微形態学に移行したが、超微形態学では、「見ればそこに何かある」は正しいが、見えないからといって、そこに何も無いわけではなくて、染め方（検出の仕方）によって、異なるものが現れること、つまり、見えるもの（見え方）と対象の化学的性質とが密接に関わっていることを学んだ。

次に宗教との接点を振り返ってみる。評者の宗教は何かと問われて特定の宗教をあげることはできないが、生い立ちからすれば、仏教に一番縁があったと言える。ただそれは、日本人一般の、「葬式は仏式だけれど結婚式は神前または教会で」という宗教との関わりよりはずっと深い仏教との関わりであった。それは、父母が熱心な仏教徒だったからである。私の父母の青年時代には村の浄土宗のお寺に日曜学校があって、若い男女がそこに通い、父母はそこで出会って、そこで、つまり仏前で、結婚式を挙げたという。当時、その日曜学校は村の文化の一つの拠点になっていて、そこでオルガンに合わせて賛仏歌を歌ったり、講演会があったりしたという。父は村の小学校の代用教員で音楽を教えていたので、ここでオルガンを弾き歌唱指導をした。自由画教育を進めていた図画担当の先輩教師も熱心な日曜学校のサポーターだったという。また教師仲間にはクリスチャンもいた。この村では、キリスト教もまた盛んであった。無教会派の敬虔なクリスチャンがいて、若者を含めて多くの人が教会にも通っていたという。いま、部落の畑の真ん中に、同じ姓の本家・別家・分家という関係の十数戸

の墓地があつて、そこに並んでいるお墓の約半分は仏式で、約半分はキリスト教式である（ごく少数は神式）。評者は子どもの頃から、よく父にお寺の行事に連れて行ってもらい、本堂に座っていっしょにお経を上げたり、鐘をついたりした。家でも、折にふれてお経を上げた。毎朝、仏壇に新しいご飯を供えた。（同時に、神棚にも供えた！）

このように、始原的なものではあるが、科学も宗教も一人の人間の中で、それぞれの位置を占め共存している、と考えることができる。

「いのち」は、科学と宗教の接点である。人間は生きるために、生ある動物を殺し、あるいは生を止めて、その肉や卵をいただく。野菜や果物も、生ある植物の芽や葉や実であり、その生を止めて、人間のためにいただいている。したがって、生きとし生けるものに感謝し、自分の必要とする最小限の殺生で済ませなくてはいけないと教えられ、それは納得できるものであった。農村社会は、生き物の循環、いのちの連鎖で成り立っていた。

私の物心つく頃は、長い戦争が終わり、食べるものは乏しかったが、みんなが新しい平和な日本を作っていくという理想と希望に燃えていた。その後、書物や映画その他から、戦争の悲惨さ、残酷さ、非人道性、反道徳性を知るようになった。いまでも地球のどこかで戦争が続き、また国内でも、人を殺したとか殺されたとかいうニュースが流れてくるが、これらの言葉を聞くたびに耳を覆いたくなる。どの宗教にとっても、殺生は最大の悪ではないだろうか。また人間性の破壊に対してその尊厳を求める戦いにおいて、宗教者が指導的役割を演じたことを歴史が教えている。インドの独立を求めたガンジーや、ベトナム侵略に抗議して焼身自殺した仏僧や、人種間の平等を訴えたマルチン・ルーサー・キング牧師は、その宗教的信念ゆえに偉大な力を発揮し得たのではないだろうか。

3. 科学と宗教

科学は、その対象によって、社会科学、人文科学、自然科学に分けられる。そのどれもが、人間の生活の中で体系化されてきた学問である。ここでは、評者の専門とする自然科学について述べてみたい。

人類が自然を相手に自然の中で生きていた時代にも、経験から身につけた知恵あるいは哲学があったであろう。また、人間は生活の中で、怪我や病気、身近な人の死、凶作、不漁など、不幸な目に遭遇したときに、なぜそのようなことが起こったのか、その原因を知ってそれを取り除こうと思ったであろう。これが、自然科学の出発点といってよいだろう。因果関係、つまり原因と結果がはっきりしていることは、自然科学の条件である。別の言い方をすれば、結果を予測でき、現象を再現できるということである。しかし自然科学は、今ある説とは別の説明や反証の可能性を残している。「いま分かっていること」が絶対的ではない。新しい事実が見つければ、つまり、いままでの説で説明できないことが見つければ、新しい理論が打ち立てられる。そうして、進歩していく。だんだんに精密になっていく場面もあるし、天動説から地動説のようなコペルニクスの転回が必要なこともある。

これに対して、美しさや悲しさ、芸術作品からくる感動などは、その原因・要因が必ずしも説明できなくてもよい。あるいは、生活環境の違いから、人によって評価が異なるかもしれないし、それを無理矢理、点数で評価しても仕方がない。原因・要因が多様で複雑すぎるのかもしれない。すべての物事を、自然科学の方法・用語で説明しなくても良いのだ。それが、芸術であり、宗教だと思う。証明できなくてよいのだから、宗教も芸術も多様な形をとり、個人個人の心の中では絶対的にもなりうるのではないか。

失敗の経験や偶然の発見の蓄積から、人類は徐々に自然や社会の法則を知ることになる。ところが、どれもすぐに原因が分かるわけではない。本

当らしく見えても、それが正しいと確定されるには何年もかかるかもしれないので、問題がすぐには解決しない。しかし、答えがわからなくても、現実の今の心は平安を必要とする。心を平安にする仮説があれば、それを取り入れる。心の平安は宗教の役割である。

たとえば、死はどうしても避けて通れない。死別は悲しいが、それ以上に、自分にもやがて死が訪れることを考えると、心が穏やかではない。なぜ人は死ぬのか、どうしたら死を避けられるか、に対して自然科学的な答えはない。死を不可避のものとして受け止め、「死に至る生」こそが重要なのだと納得する。このように、とりあえず「わかる」ことは科学が進めるが、わからないことは宗教が引き受ける、という分担になっているのではないだろうか。

それでは、科学が進むにつれて、宗教の持分（守備範囲）がどんどん狭くなるだろうか？ 科学が進歩して何かが明らかになると、その分、未知の分野が狭くなるだろうか？ しかし、そうではないことを、科学者（少なくとも自然科学者）はよく認識している。新しい発見があれば、またその先に、大きな課題が見えてくる。科学はそうやって、次々と新しい未知の分野、未踏の峰に向かって進んできた。世の中には人知では分からないことがある、という不可知論ではないが、少なくとも現時点で、数字や数式や化学式では説明できないことがある。将来、それが説明できる世になっても、それですべてが解明されたことになるかという、さらにその先に未解明のことが存在するだろうと予測することはできる。いま、現実には生きている人に必要な答が自然科学から得られなければ、宗教に求めるのは当然かも知れない。この場合、特定の宗教を意味することもあるだろうし、漠然とした自然の力への畏怖であるかもしれない。

4. 医学と宗教

宗教の出発は、死者を弔うこと、死をなげき生を尊ぶことにありと理解している。どんな文化にも、病者への癒しや死者への弔いが過去にもあったし、また現在もある。「癒し」が、具体的に身体に対する働きかけとして（物理的・化学的・物質的に）行われた場合に、それらの経験が積み重なると、「癒し」の仕方によって効くものと効かないものが分かってくるであろう。そのような経験の積み重ねが医術（あるいは医療、医学）のものになったのではないか。そこで使われた手段や道具・材料のうち、効き目が分かりやすかったのは、食物も含めた医薬であったと想像する。医学も医薬も、英語では *medicine* である。伝統的な医術は民間療法として、いまも生きている。癒す人が施術者として専門化し、やがて薬師（くすし）あるいは薬学者（化学者）、医療者（医学者）として分化していったかもしれない。

一方、肉体に対する働きかけが効を奏さなくても、心に対する働きかけが患者への「癒し」となることは、現在でも経験することである。これが宗教の起源だろう。癒す人＝施術者は、祈祷師、あるいは宗教家として専門化していったと想像する。

はじめは、体に対する働きかけも、心に対する働きかけも、同一の施術者が行っていたのではないか？ つまり、医療者と宗教家が分化していなかった。また言い換えれば、医学と宗教は「癒し」に共通の起源があるのではないかと考えたりする。

自然科学における「真理」と日常性（常識）のあいだには乖離がある。高度に発達した近代自然科学は、人間が五感で感じられる常識より、ずっと桁違いに大きな、あるいは小さな、あるいは長い/短いものまで観察できるようになっていく。そのようにして求められた科学の結論を、そのまま人間の生活に当てはめてよいか、という問題があるのではないか。科学

の「進歩」に圧倒され、これに疑問を持って、それに異義を唱えることを躊躇してしまいがちだが、脳死と臓器移植、クローン技術、遺伝子診断など、現代医療がなげかける人間のいのちへの新たな課題に対して、常識の側からも自信を持って発言してよいのではないか？ そのことにより、相互理解が進むのではないだろうか？

5. 本書から得たこと

日ごろ、宗教との接点を意識することの少ない自然科学者の一人として、自らの専門分野である自然科学について、そのありかたと共に、こころ（＝宗教）にも踏み込んで考えることの重要性を認識できたのは収穫であった。本書の読者による科学と宗教の対話の試みがさらに深まることを期待する。

じつは評者は、2002年度～2005年度に名古屋大学大学院医学系研究科（看護学専攻・医療技術学専攻・リハビリテーション療法学専攻）の共通科目として、文化人類学者の協力の下に「生と死の社会文化論」という科目を担当してきた。また2006年度より中部大学生命健康科学部において「生と死の文化人類学」という講義を担当している。これらの科目を開講した動機には、上に述べたような背景に加えて、人体解剖学教育という特殊な体験の中で芽生えた問題意識があったからである。この体験の特殊性のために、本小論では、あえてこれに触れなかった。人体解剖学教育と「いのち」、宗教と科学については別の機会に考察したい。